

口を開ける事はならんぞ、サア次良貴俺と一緒に稽古屋へ行かう」

「けども、なんやおかしいな、姐貴どないしよ」

「次良はん、常はんも引込みがつかん依つてにあんな事を云ふてるのやわ、途中で逃げたら逃したげとくなアレ」

「馬鹿、同じ様な事を云ふて依る、サア次良貴、俺が此處に居るのに向ふに俺が居ると云ふ筈がない何にしても怪しいぞ、次良貴サア密と覗いて見い、俺が居るか」

「心細いな、常やん其處に居てゝや、ア、常やん居るくお前が向ふに居るで」

「何居るか、いよく狐狸妖怪の類ひぢやな退いてみい、ほんに居るな、着物の縞から貰入まで同じ事や」

「常やん居るやろう」

「フム此處に居るのが俺ぢやが、彼奴は誰や、俺が彼奴か、彼奴が俺か」

「常やん其様な便りない事を云ふたら何もならんがな」

「サア次良貴お前家中へ這入つて行け、此貰入を貸してやる家中へ這入つたらどうでお前に盃を指し依る其手を捕へて手首を調べて見い、指が長ければ宜いが先が丸かつたら手を放すな、此煙管で殴れ、俺が這入つて行て遣る宜いか」

「常やん門に待つてゝや、お師匠はん今日は」

「オ、次良はんたづか、どうぞ此方へお上り、今常はんが來はつたんで一杯飲んでまんね、丁度宜い處へ來とくなアつた、今度の會で甚い貴郎に辛度をさしまして、一寸常はん、居眠つてはるわ、次良はんが來てておましたわ」

「イヤ次良貴お出で」

「イエ……」

「何も有まへんけど、も次良はんチョツと一ツお盃、御免やす」

「イエ大きに有難とう、お師匠はん是れお酒でおますか、馬の小便やおまへんか」

「阿呆らしい何を云ひなはるね、次良はんサアどうぞ」

「ア、左様か、けども氷が羊羹や依つてに」

「次良はん貴郎甚い慄へてなアるナ」

「イ、エ慄へてエしまへんね、身體が細かう動いてまんね、ほんに是れはお酒や」

「鰻の蒲焼どうだす」

「鰻や云ふて蛇やおまへんか」

「次良はん妙な事ばかり云ふてはる、サアお召上り」